

〈高松キャンパス 千頁読破記〉

優秀賞

技術者にとって大切なこととは何か。

建設環境工学科 4年 紙本 四季子

- ①『医者、用水路を拓く』
- ②『中坊公平・私の事件簿』
- ③『原田正純の道』
- ④『問題解決の授業』
- ⑤『ロジカル・シンキング』
- ⑥『日本人はなぜ日本のことを知らないのか』

①～③は建設工法や環境のレポートを書くために読んだ本である。④～⑥は長岡技科大のアドバンスト・コースに参加するにあたって、あらかじめ何冊か読んでおくようにと指定された図書があったので、そこから選んで読んだものである。

①～③には共通したものを感じた。

第一に「現場主義」である。

中村さんは医師でありながら用水路建設の現場に立つ。それも自分で用水路を設計し、実際にローダーを運転し、銃撃してきたアメリカ軍に抗議し、現場に立ち続ける。中坊さんも現場の人である。森永砒素ミルク事件の時、仕事の休みの日を使って患者一人ひとりに会いに行った。ある母親は、医者へ行っても脳性マヒという診断しか受けられず、そのうえ砒素ミルクの影響を聞いた途端に診察を拒否され、生活に困窮しながらも、砒素ミルクを作った森永よりもそのミルクを飲ませた自分を責めていた。中坊さんは母親とともに泣きながら子ども達の将来を救うことを決意する。原田さんも現場の人である。水俣病の患者を診察して回り、その苦しみに触れ涙し、少しでも患者の力になろうとする。

第二に「人間から発想する」ことである。

課題に直面した時、自分の知識や理解、こうあるべきだという固定観念から考えるのではなく、現場へ足を運びそこにいる人間から学ぶ。中村さんは農民から水が必要であることを学び、中坊さんは依頼者から必要なことは何かを学ぶ。原田さんも患者から何が求められているのかを学ぶ。三人とも人間から学び人間から発想する。

第三に「目的が明確である」ことである。

中村さんの目的は、飢餓に苦しむアフガンの農民を救うことであり、用水路の建設はそのための手段に過ぎない。中坊さんの目的は、被害者を少しでもその苦しみから救うことであり、法律や裁判はその手段に過ぎない。原田さんの目的は、患者を少しでもその苦しみから救うことであり、医療も種々の活動もそのための手段であるに過ぎない。

④を読んで驚いた。そこにあるのは「問題解決能力」の身につけ方だけで、具体的な人間がいなければ目的もない。どれほど「問題解決能力」を身につけようとも、それを「暴力団の資金集め」に利用するならば、そんな能力などないほうが良い。そして、何より現場がない。現場がないので話がトンチンカンである。一限目に「数学の成績が下がってき

た」という問題の解決の道筋が書かれている。ところが現場がないので、「どうやって成績を回復させるのか」ということしか考えられない。現実の人間が「数学の成績が下がってきた」ならば、家庭に何らかの問題はないかと、友達関係でトラブルはないかと、イジメはないかと、まずそう考えるのが普通であろう。そういうことを全部すっ飛ばして「問題解決能力」だけに目を奪われているから絵空事のような話になってしまう。

⑤はわけが分からなかった。④と同様「ロジカル・シンキング」を身につけることだけが目的のようで、現場とそこにいる人間がいらない。だから、人間からの発想もない。要するに、社会でプレゼンをする時などに「課題」と「結論」とその「根拠」とにつながりがないことが多い。よって、「つながりをつけるためにはこうしなさい。」と言っているに過ぎない。何だか、出世のためのスキルアップ術を聞かされているようだ。もっと大切なことがあると思う。「現場主義」であること、「人間から発想する」こと、そして「目的が明確である」ことだ。そうすれば誰でも必然的にロジカルになると私は思う。

⑥は最初のページを読んでびっくり返りそうになった。現場もなければ人間もない。ただ「日本をすばらしい国だと思いなさい。」というそれだけである。「国」とはどういうものかもなければ「すばらしい」とは具体的にどう思うことなのかもない。これこそ「問題解決能力」もないし、「ロジカル・シンキング」もない典型だと思った。

技術者にとって大切なことは、問題解決能力が高いことやロジカル・シンキングが出来る事ではないと思う。現場に立ち、そこで苦しんでいる人間をまっすぐに見つめ、共に泣き、目的を明確にし、強い決意を持ってそれを実行することだと思う。いかにロジカル・シンキングが出来、問題解決能力が高くとも、結局技術者のすることが人間を苦しめることにしかならないとしたら、そんなものないほうがいい。私は、何よりも、人間を見て、そこにある苦しみに共感を抱くことができ、それを少しでも和らげることに全力を尽くせる技術者になりたいと思う。

『医者、用水路を拓く』 中村哲 石風社 375P

『中坊公平・私の事件簿』 中坊公平 集英社新書 206P

『原田正純の道』 佐高信 毎日新聞社 188P

『問題解決の授業』 渡辺健介 ダイアモンド社 117P

『ロジカル・シンキング』 照屋華子・岡田恵子 東洋経済新報社 227P

『日本人はなぜ日本のことを知らないのか』 竹田恒泰 PHP新書 239P

優秀賞

千ページ読破記

機械電子工学科 2年 谷川 豊章

僕は、英語が好きだ。今の目標は、全く生活環境の違う外国の人と会話ができるようになることである。それが出来れば、たくさんの人と話すことで、自分の感じ方や考え方が変わり、思考範囲を広げてくれると信じている。ち

なみに今、僕は英語の音楽を聴くことにはまっている。

『愚か者、中国をゆく』は約二十年前の著者の中国旅行の話であるが、本の中で西洋と東洋という言葉がよく出てきている。そのことで特に気になった事柄が二つある。

一つ目は、著者が国際と名のついた大学に入ったすぐ後のことだ。あらゆるところで目につく光景は、アメリカ人団体の周囲に一定数の日本人が群がる、というものだった。日本人学生たちは、うっとりとした瞳でアメリカ人の発する英語に耳を傾けている。著者は「国際化」とはほど遠いと感じ、香港に留学したが、同じような感じであった。

逆に、西洋の「国際化」されている大学で東洋から留学生が来ていたとする。これは、僕の勝手な想像であるが、同じようなことにはならないだろう。西洋の代表の一国であるアメリカには、元々いろいろな国籍の人々が住んでいる。西洋と比べ、日本では外国人と会う機会、ましてや話す機会はほとんどない。初めて外国人から話を聞くということが相手の人に対しておかしな対応をしてしまうのだと思う。

二つ目は、香港の大学で親しくなったアメリカの友人と中国旅行をしているときに著者が思ったことである。著者は中国の不条理に対し小出しに怒りを爆発させていたが、そのアメリカの友達は抑えていた。それは、彼が中国に対して感情を言葉にすれば、純粹に中国一国に対する感情であったとしても、著者が「東洋」に対する挑戦として受け止めてしまうと思ったからだ。

東洋で西洋人と交流するというのをはじめて難しいと感じた。感じ方に対する違いの原因は、西洋の経済水準が高く、東洋の国同士の文化が似ていることだろう。そして、自分の思っていることと、相手の受け取ることが食い違ってしまう。僕はよく、外国の人と話しをする時は、相手の国のことをある程度知っていなければならないと聞く。しかしそれだけでなく、様々な国の関係も知っておく必要があると感じた。

このような西洋と東洋の間の問題は、たくさんの外国の人との交流の機会が増えることでだんだんとなくなっていくのだと思う。また、自国である日本の良さも見つける事が出来る。英会話力を向上させ、積極的に会話等が出来るようになりたい。

『愚か者、中国をゆく』 星野博美 光文社 335P

『ハナシにならん!』 田中啓文 集英社 406P

『天使に涙とほほえみを』 赤川次郎 角川書店 332P

〈高松キャンパス 夏休み体験文〉

優秀賞

体験することで学ぶこと

電気情報工学科3年 山田 季美佳

アジアの学生の高専体験プログラム。これはアジアの学生に、実際に高専での生活を体験してもらうことで、留学

生として誘致することを目的としたものである。このプログラムではアジアからの参加学生の他にも、日本の高専の学生もアシスタントとして参加できる。以前から国際交流に興味があった私は、案内の掲示を見てすぐに応募を決めた。そしてこの夏休み、私にとって大きなチャンスを手にしたのだ。

プログラムが始まるまで、私は早くその日が来ないかと待ち望んでいた。留学生との交流は英語で行うと聞いて多少の不安もあったものの、正直に言うと楽観視していた。これまで学校での英語の授業は真面目に受けていたつもりであったし、プログラムに向けて復習もした。「きっと大丈夫。なんとかなるだろう。」と信じていた。しかし自分の考えの甘さに気付かされる。

アジアの学生との交流で、最初に直面した問題は会話することであった。まず相手の言っていることが聞き取れない。聞き取れたとしても、自分の言いたいことを伝えるための英単語や文法が出てこない。そしてこちらが話しても聞き取ってもらえない。後から聞いた話だと、アジアの国によっては英語の発音が訛っているらしい。そして逆に、彼らにとっても私の発音は訛って聞こえるのだろう。そのような予備知識を入れておかなかった自分の認識の甘さを悔やんだ。そして、自分の英語の能力はいかに浅はかであったか思い知らされた。一日目の日程終了後、特に大がかりなこともしていないはずなのにひどく疲労を感じた。「プログラムが終わるまで、毎晩1人でこんな気分を味わうのか。」と思った。しかしこのまま会話することから逃げれば、絶対に自分は後悔するだろうと思った。国際交流はずっと待ち望んできた機会なのだ。その日の夜、私は持ってきた英単語の本を捲った。また、その日うまく英語で伝えることができなかった言葉を、もう一度冷静になって自分の中で組み立てた。諦めたくないという一心だった。

アジアの学生と共に過ごすうちにいくつか気付いたことがある。まずは、伝え合う努力をしようとするれば、それは可能になるということ。相手が話していることを理解したようなフリをしても、相手にはそれが嘘であることが伝わる。そして逆に、何度聞き返しても理解したいという気持ちがあれば、相手は伝えようという努力をしてくれる。それは私が話す時も同じである。伝えたいという気持ちがあれば、相手に届くのだ。手振りを交え表情も大きめに変化させ、時には筆記も使った。普段日本人同士で話す時には、経験しなかったことである。

次に、音楽は万国共通だということ。パートナー校であったベトナムの女子学生は、歌が大好きであった。ある日バスでの移動中、イヤホンの片側を借りて、彼女のお気に入りの曲を聴かせてもらった。そしてその曲を覚えてからは一緒に歌った。言葉を交わさなくても、私たちは楽しい時間を共有することができたのだ。

そして、最後に、違う国の人であっても、同じ人間なのだということ。このような言い方はすごく失礼かもしれない。しかし、確かにこう感じたのだ。実際に交流をする前は、自分と他の国の人たちは違うのだという意識があった。何が違うのかと言うと上手く説明もできないが、「理解し合う

ことはできないだろう。上辺の会話しかしないだろう。」と
思っていた。しかしその考えは今、自分の中に残っていない。
同世代の女の子たちとは、お互いの恋愛の話に華が咲く。
トランプでゲームをすれば、目と目で駆け引きをし、一緒
になって盛り上がる。そして一緒に過ごす時間が長くなれば、
彼らが母国語で話していても、どんな話をしているかがなん
となく分かってくるようになるのだ。国は違っていても、同
じような事で悲しむし、同じような事で嬉しくなる。初日に
感じた他の国の人たちと過ごす疲れは日を追うごとになく
なっていった。これこそが国際交流の一番の楽しみなのだと
感じる事が出来た。

このプログラムを終えた今、率直な感想は「楽しかった」と
言うことだ。後悔することはないのかと考えると、やはり
ないとは言えない。むしろ振り返れば、こうすればよかった
のに、という考えはいくらでも浮かんでくる。しかしその
思いが今の私の気力に繋がっている。今まで以上に英語を
学びたい、国際交流がしたいという気持ちが強くなった。
ペンを持って勉強するだけでなく、実際に挑戦してみる大
切さを学んだ。

アジアの学生の高専体験プログラム、来年度の開催校は
香川高専・高松キャンパスだ。私はもちろんアシスタント学
生として参加したいと思っている。今回と同じ後悔はしない
ようこれからもたくさんのことを勉強していきたい。そして
来年、終わった後にまた「楽しかった。」と言えるための1
年間を過ごしたい。

〈詫間キャンパス 読書感想文〉

最優秀賞

『ホテル・ルワンダの男』を読んで

情報工学科2年 安藤 翼

6月の初旬に母から、
「ルワンダって、どこにある国か知ってる？」
と、聞かれました。知るわけありません。ルワンダって、国名？
都市名？そんな感じでした。この日、ユニセフの講演会があり、
母はルワンダ教育を考える会の理事長である、マリールイ
ズさんにお会いしたそうです。僕はルワンダが、アフリカ大
陸の丁度真真中に位置する小さな国だと知りました。そして、
何日か後に、たまたま見ていたTVに、映画『ホテル・ルワン
ダ』の主人公であり、この本の著者であるポール・ルセババ
ギナさんが出演されていたのです。彼はルワンダに大量虐殺
の波が押し寄せた時、1268人の命を救った人です。彼の話は、
僕の心に強烈な印象を与えました。彼はこう言ったのです。
「私はとりたてて英雄的な行動をとったわけではない。私は
人間として当然とるべき行動をとったまでだ。」
僕はこの時、彼の本を読んでみようと思ったのです。

しかし、この本を読み終えた時、僕はこの本の内容を現実
のこととして受け入れることができずでした。読んだ
ことを後悔したのです。それほどこの本の中には、想像を

絶する、残虐で冷酷な人の姿が書かれていたのです。この
本がフィクションであれば良かった……とも思いました。こ
れまで見たり、聞いたり、読んだりした映画や本とは比に
ならないほど、猛烈なショックを受けたからです。

この本の冒頭にはルワンダの良さが書かれていました。
緑豊かな丘に包まれ、湖の多いルワンダは『青き美しい国』
と呼ばれていました。欧州の基準から照らし合わせれば、
かなり貧しい暮らしでしたが、家族は懸命に働き、良く笑
いました。愛という言葉を知る前から家族の間には愛があ
る。そんな心豊かな国だったのです。けれども、長い年月
を経て蓄積された民族間の争いは、1994年に爆発してしま
いました。ルワンダ大虐殺と呼ばれるもので、100日間で人
口730万人中の100万人が犠牲となりました。殺戮は軍人だ
けでなく、一般人をも巻き込み、昨日まで善人だった人が
隣人を殺しました。のちに『20世紀最大の悲劇』と呼ばれ
たこの事態を、国際社会は黙殺しました。国連さえも見捨
てようとしてました。その中で一人戦い、たくさんの命を救
ったポールさんを、僕は尊敬します。

彼は本の中でこうも語っています。

「人は計り知れぬ不安から気をそらす手段として、いつもと
同じ日常の雑務に喜んで没頭するものだ。」と。彼はどん
な状況下にあっても、ホテルの支配人としての仕事を続け
ました。助けを請う者は、誰であっても受け入れ、自分の
良心に従って行動したのです。それは逃げることもできず、
誰にも助けを求められない中で、彼が平常心を保てる唯一
の方法だったのかも知れません。それほど過酷な、発狂し
てしまいそうな、信じがたい日々だったのです。

結局、彼は生き残り、かくまった全ての人の命を救いま
した。運もあったかもしれませんが。しかし、彼の諦めない
強靱な心、強い正義感が、彼自身と1268人の命を救ったの
だと思います。僕は、命の尊厳と共に、人間の内に秘めた
深い強さを改めて知りました。

また、この本の中に何度も『ジェノサイド』と言う言葉が
出てきました。一つの人種や民族への抹消行為を示すもの
で、一般的には大量虐殺という意味で使われています。ル
ワンダでは、ジェノサイドを合言葉に、たくさんの一般人
が暴徒となり殺戮を犯してしまいました。しかし、本当は
こんな言葉は要らないのだと思います。この世に存在して
はいけない言葉なのだと思います。

僕はこの本の内容が、あまりにも残酷だったので苦しかっ
たです。でも、冷静に考えればこれはノンフィクション＝
現実であり、何も知らずに平和ボケして生きていくより、
世界にある現実を知って理解し、平和に向かって考えること、
行動することが重要だと思いました。

現に今、アメリカのシリアへの軍事介入が始まろうとし
ています。この軍事介入という言葉には正当性があるよう
に思われます。しかしアメリカはボタン一つでロケットを発
射させ、空爆を行います。技術力のないシリアは、罪のな
い一般市民を巻き込み、犠牲にしてしまうかも知れません。
武力を武力で押さえることが、平和への道となるのでしょ
うか？疑問もわいてきます。

私たちは、技術を身につけるために勉強しています。その技術は人を助けるためのものであって、人を傷つけるものであってはならないと思います。そういう気持ちを忘れずに僕はこれからも勉強していこうと思います。今、僕は、「この本を読んで良かった!」と心からそう思います。

『ホテル・ルワンダの男』 ポール・ルセサバギナ ヴイレッジブックス

優秀賞

科学者 レイチェル・カーソン

1年5組 勝田 稚菜

私がレイチェル・カーソンという人物を知ったのは中学校三年生の英語の授業の時でした。アメリカの偉人として教科書に写真が載っているだけで、科学者でベストセラーとなる本を書いた人という軽い説明を先生からしてもらっただけでした。その後、高専の図書館でレイチェル・カーソンの伝記を見つけました。私自身、伝記を読むことが好きなので本を借りました。そして、読み進めていくうちにレイチェル・カーソンという科学者であり一人の女性に大きな魅力を感じました。それが、今回この本で読書感想文を書こうと決めたきっかけです。

彼女は幼い頃から自然に囲まれて暮らし、本に親しんでいました。部屋にはたくさん本、家の周りには様々な動植物たち。農場を経営する父親、教師だった母親からたくさんことを学んで育ったそうです。私が印象に残っているエピソードは、レイチェルが十歳で兄から聞いた話を元に小説を書いていたことです。満足いくまで何度も書き直し、完成させた小説は子ども向けの文芸雑誌で賞を獲得するほどの出来栄であったそうです。私が十歳、いや、十五歳の現在でも苦手な、文章を書くことを好んでいた彼女は、相当な読書好きだったのだらうと思います。その頃から彼女の夢は「作家になること」になり、中学校、高校、大学へとこの夢を目標として、勉強に励んでいくこととなります。

そんな彼女は大学在学中に大きな選択をすることになります。文学の道へ進み作家になるか、科学の道へ進み科学者になるかを選ばなくてはなりません。幼い頃から自然と触れ合ってきた彼女にとって、科学者にも作家と同じくらいなりたかったのです。しかし、当時は女性が科学者になることはとても難しいことだったのです。そんな迷いの中にいた彼女を救った詩がありました。その詩の最後の一行に彼女は胸を打たれ、科学者になることを決意したそうです。「はげしい風が巻き起こった

それは海にむかって、
ごうごうとほえている
さあ！私も行こう」

私は、この詩のどこに、彼女が自分の運命は海につながっている、海が自分を呼んでいると感じたのかはよく分かりません。でも、詩の力強い響きが心の奥の何かに語りかけてくる感覚は少しだけ分かるような気がします。

しばらくして、大学院を卒業した彼女は漁業局で働くこ

とになります。此处で彼女は魚を中心とした番組の台本を書く仕事を任せられます。科学者と作家、二つの夢を彼女は叶えてしまうのです。私は、努力することで夢は現実となることを改めて感じることができました。

でも、彼女にはまだ夢がありました。本を書くことです。科学者として自然について調べ、本を書こうとしたのです。彼女は多くの時間をかけ、本を一冊書き上げました。それが『潮風の下で』です。しかし、戦争の影響で本はあまり売れませんでした。でも彼女はめげることなく新たな本を書きます。それが『われらをめぐる海』です。彼女が初めて海に潜り、海へ旅へ出て書き上げました。そして、その本はアメリカでベストセラーとなります。次の年に再版された彼女の処女作もベストセラー入りを果たすのです。私は、自らの信念のもと、納得するまで本を書き続けた彼女の姿は私にはとても真似できないと思いました。その後、『海辺』という本もベストセラー入りを果たし、作家業に専念します。

しばらくして、アメリカでは農薬による動植物への影響が心配されるようになりました。レイチェルもその一人で、農薬の危険性を伝えるために新たな本の執筆に取りかかります。でも、彼女の体はがんに冒されていました。彼女は世界を農薬の危険から守るために自らの体を犠牲にしてまで本を書き続けたのです。私は、その姿に強く胸を打たれました。そうして書き上げたのが有名な『沈黙の春』です。これもたちまちベストセラーとなりました。彼女の努力が世界中を変えるきっかけを生み出したのだと私は思います。

この本を読んで、レイチェル・カーソンという女性の強さ、たくましさを感じました。自分のしたいこと、夢に向かってひたすらに頑張ることの大切さ、諦めなければ夢は叶うことを改めて学びました。

私は、まだ十五歳なので、具体的な夢や目標がありません。でも、高専に入学したこの四月から自分で決め、自分で動くことの大切さを感じています。まだまだ長いこれからを、自分の力で切り開いていきたいです。尊敬する女性、レイチェル・カーソンのように。

『科学者 レイチェル・カーソン』（こんな生き方がしたい）
小手鞠のい 理論社

優秀賞

ヒマワりにひそむふしぎな数列

電子システム工学科3年 藤井 秀里

この自然界はどれほど緻密にできているのだろうか——この本は、僕がそう思うようになるきっかけを与えてくれた。

この本のタイトルは、『面白くて眠れなくなる数学プレミアム』なのだが、その本の中に、「ヒマワりにひそむふしぎな数列」という見出しがあった。ヒマワリの中に数列がある？あるとしてもどこに？内心僕はそう思った。数列は二年生のときに数学で習ったことがあるが、難しかったのを覚えている。あまりいい思い出はないが、とりあえず読み進めてみ

ることにした。

ヒマワリに数列がひそんでいるのは、種の部分だ。ヒマワリには数千個の種がある。そして、僕はあまり気にしたことがなかったが、種の並びには左回りと右回りがあり、それぞれがらせん模様を描いている。らせん模様は左回りが55本、右回りに34本ある。すべてのヒマワリがこの数で並んでいるらしい。本当にそうだろうか？疑問に思った僕は、実際にネットで調べてみた。本当だった。しかも、らせん模様が決まっているのはヒマワリだけではないらしい。松ぼっくりも、それぞれ8本、13本のらせん模様があり、どの松ぼっくりでもこの数は同じだそうだ。身近なものでもよく観察すれば知らないことがたくさん見つかるものだなと感心させられた。しかし、驚くのはそこではない。らせん模様の数、つまりヒマワリの55、34、松ぼっくりの8、13はある数列になっているのだ。その数列はフィボナッチ数列といって、1、1、2、3、5、8、13、21、34、…と、前の二つの数を次々に足して出来上がる数列のことだ。そういえば教科書の巻末資料にそんなことが書いてあったなと思い出した。ヒマワリも松ぼっくりも、この数列に該当する。調べてみると、パイナップルや樹木の枝分かれにもこの数列を見つかることができるらしい。そして、この数列で、次の数が前の数の何倍大きいかを調べるために次の数÷前の数を計算していくと、その比は黄金比と呼ばれる1対1.618…になり、これを角度で表すと、黄金角と呼ばれる137.5度になるそうだ。そして、この137.5度こそが、ヒマワリにひそむ数列の鍵を握っている。種が、137.5度回転した先の少し離れたところにつくことにより、隙間なくびっしり種をつけることができるのだ。137.5度から1度でもずれてしまうと、隙間が空いてしまい、びっしりと種をつけることはできないらしい。このことを知って僕は、ヒマワリはよくできているなと思った。137.5度に並ぶから効率よく種を並べることができるし、効率よく種が並ぶからたくさんの子孫を残すことができるのだ。でも1度でも違ってしまえば効率よく種を並べられなくなってしまうわけだから、すべてのヒマワリが137.5度に並んでいることを考えると、とてもすごいなと思った。と同時に、効率よくできているものはヒマワリだけではなく他にもあるのではないだろうかと思い、ネットで調べることにしてみた。

調べてみると、クジラのひれや、カモメの翼など、ヒマワリの他にも効率よくできているものがいろいろ見つかった。そして、そういった生物や植物の構造は製品開発にも取り入れられており、「生体模倣技術」と呼ばれ、世界中で研究が活発化しているそうだ。日本では自動車や電機各社で成果をあげ始めているらしい。

例えば、日東電工ではヤモリの足の裏をヒントにした粘着テープを開発したそうだ。ヤモリの足裏には細かな毛が密集し、さらに一本一本の毛の先端が百～千本に分かれる。この構造でヤモリは壁や天井から落ちることなく自由に歩き回れる。この構造を模倣することで、同社は、どんな特殊な環境でも強力に接着する一方、簡単にはがせる粘着テープを開発した。またシャープは、扇風機の羽根の形状に二千キロの距離を移動するアサギマダラと呼ばれるチョウ

の構造を取り入れた。高効率の飛行を可能にしている羽根表面のうねりと外周部のくびれをまねることにより、扇風機の羽根の枚数は減らしたにもかかわらず、騒音が小さくなり、風の当たり具合が心地良くなったそうだ。この他にも、掃除機のスクリーンの表面上の構造でネコの舌を模倣したり、自動車部品の摩擦を減らすためにキリギリスの足からヒントを得ている会社などもあるそうだ。「なるほど」と思われるものもあれば、「えっ、そんなものが？」と思うようなものもあり、調べてみるとなかなか興味深かった。自然界には商品の性能を高めるヒントが詰まっているのだ。

今回、この本を通して、今まで知らなかった多くのことを知ることができた。自然界にあるものが本当に効率よくできており、理にかなっているという事実は知らなかったし、感心させられた。また、そういった自然界の知恵を製品開発に取り入れ、実用化を進めていることも興味深かった。人間が自然から教訓を得て製品を作っていることは、自然界にあるものが人間の作るものより高い技術を持っていることの証拠なのだろう。正直僕は、今まで自然を深く観察したことはあまりなかった。でも今回、深く観察すれば身近なものでも新しいことが見つかることを知ることができた。これからは、そのことを意識して、ものを深く見ていきたいと思う。自然から学べることはまだまだありそうだ。

『面白くて眠れなくなる数学プレミアム』 桜井進 PHP研究所

佳作

“音楽”が、一段と好きになりました。

専攻科2年 高津 朋裕

狭いカラオケボックスの中に佇んだ小汚いテーブルには、注文したフライドポテトとアイスココアがこちらを恨めしそうにじっと見ていたが、私はそれをよそ目に、友人と合唱曲「マイバード」を歌っていた。合唱曲なんて七年前に中学校の卒業式で「旅立ちの日に」を歌って以来、一度も歌っていなかったが、この本を読むと誰もが歌いたくなるはずだ。

ところで、私は高専に入学して吹奏楽部に入部したが、七年間活動してきた今、みんなで一つの音楽を創りあげることに大変さや、素晴らしさがあることを私は知っている。聴衆をうっとり魅了するような音楽を創造するためには、当然一人ひとりが努力しなければならないが、各パート（四声・楽器）がそれぞれのメンバーをまとめあげることも重要である。

この本は、コンクールに向けて奮闘する多摩川高校合唱部の中でも、上級生が少なく、実力に乏しいバリトンパートに入部した新一年生に焦点を当てた作品である。

私は今まで、良質な音楽を創造するためには、練習日を増やすことや、ユニゾンやハーモニー、リズムを合わせることにしか考えてこなかった。しかし、この本を読んで、作曲家や作詞者の意図を探ることから、さらに、良質な音楽が生まれてくることが分かった。

たとえば、バリトンパートの新一年生部員の乙川光太が、

「ばら・きく・なずな」という題名の作詞者の詩画集『四季抄 風の旅』（星野富弘）を乙川が夕食も忘れて読み解いていった場面だ。

作詞者が体育教師になった年に、大怪我のために全身が動かなくなり、詩画集にある「ばら」「きく」「なずな」の絵も、文章も、すべて入院生活中に口でくわえた筆を操って描いたものであることを知る。詩の中に書かれた「神様がたった一度だけ この腕を動かして下さるとしたら 母の肩をたたかせてもらおう」からはじまる詩に万感の思いが込められていることも知る。顧問の音楽教師・小倉詠子が「ハミングだからって、さらっと流さないでほしいの」と言っていた言葉が、私の心にもゆっくりと染み込んでいった。

“音楽”という字は“音を楽しむ”と書く。この本に登場する人物たちは、音に対して一生懸命で努力することを楽しんでいて。自ら悩み苦しむ周囲の人間と衝突し、ダイヤのように輝いていく。まさに、青春の一ページであろう。

カラオケも終わり、カラオケボックスを出た私は、使いすぎた喉に手を当てながらも友人と「たのしかったね。」と言葉を交わす。焼き立ての煎餅のような夕日は次第に重くなっていき、遠くの方で踏切信号の鍋を叩く音が聞こえてきた。

さあ、明日からまた練習だ。

『歌え!多摩川高校合唱部』 本田有明 河出書房新社

佳作

『ふがいない僕は空を見た』を読んで 情報工学科3年 矢野友加里

この本を読み始めてすぐに思ったことは、性に関する描写が多く、この本の帯に書いてあった雑誌記者や新聞社が絶賛する意味が分からず、この本を選んだ事を少し後悔した。しかし、なぜか途中で読むのをやめる事はなく、一日で読み終えた。読み終えて思った感想は最初とは正反対で、出会えてよかったと思った。たくさんの本を読んでほとんどは、自分の経験と結びつく話があり、共感することで本の出会いに感謝してきたが、今回の本はそれとは違う感じ方であった。

この本は、主人公である高校一年生の斉藤卓巳が、既婚者である年上の女性であるあんずと性行為を行うという事件を中心として物語は進められ、一章ごとに異なる人物を中心として書かれている。それは、斉藤卓巳、あんずと呼ばれる岡本里美、斉藤の彼女の松永七菜、斉藤の友人である福田良太、斉藤の母親の斉藤寿美子の五人である。

私がこの本を読みながら思ったことは、私が今まで生きてきた中で経験したことがないだけでなく、想像を超えた物語だということだ。本を読みながら、登場人物がする行動に疑問をおぼえた。それは、特定の人物ではなく、それぞれの章で中心として書かれている人物の全員にだ。例えば、あんずの大学時代、声をかけられたすべての男性と性行為を行った。そしてそこには、お互いの好意は無かった。ただ、性行為を目的としたあんずの行動が、私には理解す

る事ができなかった。また、福田は、斉藤の事件に関する写真を学校や近所にばらまいた。その行動は、斉藤に対する嫉妬が原因だった。どんな理由があったとしても、友達のを裏切るような行動にまたも理解ができなかった。しかし、それらの人物も、いじめや家庭の問題など過酷な経験をしている。だから、ただ登場人物たちを憎むことができないのだ。主な人物をこのように描いているのには、何か理由があると思った。

そして、この物語に大きく関係してくるのが「性」という言葉だ。性行為を行った事で自分自身に大きな傷をおった斉藤。大学時代の性行為が原因で妊娠しにくい体となったあんず。大好きな斉藤ととにかく性行為をしたい松永。性という言葉に憧れ続け、その結果精神がぼろぼろとなった松永の兄。このような事が物語として書かれており、あまり良いイメージを持つことはできなかった。だが、最後の五章では、助産師である斉藤の母。私は、この構成にも何か意味があると思った。

私は、この物語で伝えたい事は、生きていく事の大変さ、そして生きていく事の素晴らしさだと思った。一つ目にあげた、中心になる人物の描き方。それは、リアルな人物にしようと思ったからだと思う。人には、愛すべき所はもちろん、逆に憎んでしまうところも存在する。物語の中心となる事件は、経験もなく想像しにくく共感できない事が書かれているのに読み続けることができるのは、登場人物が実在に近く描かれているからなのだと思う。また、「性」という言葉が関係しているので、それが伝えたい事だと思ったが、最後の物語の中心が助産師である母の話だったので、それは違うのではと思った。なぜかという、今までの「性」は、人を傷つけてきた描写が多かったが、助産師とは新たな命を生み出す仕事であり、それは性行為を行うことで成り立つからだ。

この本は、生々しく泥臭い表現で書かれているが、それこそがこの本の魅力だと思う。大変な出来事を経験してきた人たちが、苦しみながらも生きている姿は、共感できる部分がなくとも、その姿に自分も頑張れるかな、と思わせることができると思う。この物語の最後には出産するお話が書かれている。その意味とは、生きていくことへの肯定だと思う。辛い出来事があっても、人は、生きていくことが自分を成長させる方法だと思う。題名にある「空を見た」。それは、苦しい事からも必死で前を向いて行こう、生きていこうという著者の本当の気持ちが隠されているのだと思う。読んでいる最中に考えるのではなく、読み終えていろんな事が分かり、考えることのできる本だった。今までに読んだ事のない種類で、きれいごとばかりではなく、なかなか描かれる事のない生きていく上での人間の汚い部分も書かれている。自分だけが苦しんでいるのではなく、他の人も苦しんでいる。見上げた時にある空が、私達を繋いでくれている。そう思うだけで心が軽くなる。私は、これから起こるかもしれない大きな困難に不安を抱きながらも、自分の不甲斐無さに落ち込んでも、立ち止まって空を見上げ、前を向いて進んでいこうと思った。

『ふがいない僕は空を見た』 窪美澄 新潮社